

續猿蓑集

七部注解之五

中村俊定文庫

文庫 18

1006

14

七部集注解
續
懷
義
集





續梅溪集解

ハ
九
夕
中
夕
降
夕
降
夕
降

左馬の如く

五國

ばあやうと云ふ所の海にゐるやうにして
 白の羽のやうな鳥もゐる同の羽のやうな鳥もゐる
 そとにけしき人の知れぬ海にやうな鳥もゐる
 羽のやうな鳥のやうな鳥もゐる大佛のやうな鳥も
 羽のやうな鳥のやうな鳥もゐるやうな鳥もゐる



夜の事もさうなう

難の業の名ふさ

群をともく様も様も字

付保しるもの服

削中に長力扱はるの風

まうに里のしらさう

難の業と扱はる地のもうは月見の夜

ひものさう

里

は

海

里

見

時さうにや一葉も様もさうさう市村の地

付保しるものさうの語さうさうさう

さう

字も長力扱しるものさうさうさう長力扱

地名不祥

その風さうさうさうのさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

「さうさうさうさうさうさうさう」

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

海

見

は

里

産まゐるにこゝろおの神々光、娘の豊穡の
のふさの供へるに、おねの妻の神々
て入るまゝも、おのつと、おねのまゝに、おねの
様へ

ゆきの水に、おねの神々

おねの神々

馬鹿

おねの神々
おねの神々
おねの神々
おねの神々

馬鹿
馬鹿
馬鹿
馬鹿

おねの神々

おねの神々
おねの神々
おねの神々
おねの神々

おねの神々

おねの神々

おねの神々
おねの神々
おねの神々

おねの神々

外に流るゝ田舎の禿木に
何となく金持あり
此のさし合つて抱いてゐる
縁の所を
何となく抱いてゐる
文情の
人にと
いふ所を

[illegible]

老父秋の信ありよとぞ
涙のしほりあり

ちかきうもていりしものもさうさういふは
 居ぬはとて川さうのよきなり
 ちかきうもていりしものもさういふは
 居ぬはとて川さうのよきなり
 ちかきうもていりしものもさういふは
 居ぬはとて川さうのよきなり

知事杜用をいふも初林と云ふは杉のけし
たれよりよとては所由なり

西へ行くも幸海の手電 里

先^{義先}を風のとほ一徳 里

休屋もあつてなほ花を 里

を舒りて平の漆 纏^{カミ} 里

晴のころとてちや掃箒 里

なりぬ金とてむく 市 里

伊勢國から河のうへ 有馬村より4方登つた

いねが人を種こも、まゝのうへに 俚言に

白き種は父母と云ふ母もいふ言に中々の見

ふの種は赤まのうへに

昔々年暮の 田舎もあつて風のとほ

御座りしこの田舎は家もあつた

は

風とてうへにまゝなつて

まゝなつてはなつていふ所は 漆纏^{カミ} 里

まゝはぬとていふ所は 漆纏^{カミ} 里

わが世にきこゆ

淑くくきこふつめ少き

早ききこふつめ少き

水つて枝をきこふつめ少き

知るくきこふつめ少き

いふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

殿下を館のきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

物きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

料理のきこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふくきこふつめ少き

きこふく

花の心葉を主として見る

あ、田の土の乾く陽を

五 五

五ノ切、
取付と傾斜板の
作

松蔭の風

[illegible]

ちの陽をにきへん

之五

里甫

冬の杓のつらさ

江園

ち根の
まね
なう
りて

莊子

上
之
氣
柔
順
也

丁亥

所
地
子
月
名
以
集
錢

15

新らり
と
通ふ
と
次



多るは多ね 刷ぬ 切可うとて 此を 花押して 宛に
 して 一々の 成就を 祈る

其ノ如キ
ノ如キハ
之ヲ風情
ヲ書ク

才に
うま
の
け
た
め
そ
と

蜀月於桑飲ハ上根牛唇子之皮の味研列

一

所きれのいふ所はもとて切なる月久の詩集了

所を設けしとちり通る者な中秋の通
 神を2介

神子

知恩院の聲が
傳へて

楊の
坊を
楓
美
や
く

煙の鐘と水と柳と

同利てあそぶ

牧名と新田のあゆまをて

范 里 范 里

しつはるゑ
日 妙



知恵の活潑な字の聲の活潑な字の聲と
音の活潑な字の聲と

方如修遠如御之

楊の屋根の草をよきとてゆふに

是之曰後學之是也

方定は夏に可なりを定めてあつた風を重くし

次々ともて其の功を包へに交へしむ

此魚乃
 花菱菜
 之御子
 也

子之山序心之丹鈕の月利十物に

姓名 文一
以上 二代 田色 國海 二 室 持 子

[illegible]

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

まゝのうゑにうゑにうゑにうゑに

石性なりて世にも長閑なり

芝

こまめな腰よりなる花葉

花

まめの紙紙包にあら

花

今もわきまは

花

砂と這葉の中の結縁の所

花

別な花よりなる花

花

花官の身の中より花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

花と這葉の所

きんのきんきんきん 別注の紙をいふをきんきん
いふ紙をきんきんきんきんきんきんきんきん

注のきんきんきんきんきんきんきんきん 見

一ふきんきんきんきんきんきんきんきん 見

紙のきんきんきんきんきんきんきんきん 見

作の紙のきんきんきんきんきんきんきんきん 見

月影のきんきんきんきんきんきんきんきん 見

乙の紙にきんきんきんきんきんきんきんきん 見

別注の紙をきんきんきんきんきんきんきんきん
紙のきんきんきんきんきんきんきんきんきん
勝のきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

吾人古より「新白」の癖に、もとより「極」の
 名の意は「清」にも「空」にも「新」にも「極」に
 なるものなり。皆「新」也。

枕を鐵も襦ろの口とあり
 次は破れぬとてその鐵を穿たず忘るも
 おう

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

字門子光明月

新
蔵
の
の
か
け
り
考

水原を演のせし

見てもうけ年ハ花の咲きり

荷物といふなり

下る御用の用ゝとて、
此の御用の用ゝとて、

瓶
つるしりやう
さうろふ
とけ月神子
舒

[illegible]

て耕作をせしむるに
油を以て

人の世はなほ此の世なりと云ふ

漢書一

[illegible]

ふいふ
きき
う
し
に
て
な
る

何しろ春のあはれを

赤穂の春の

さくらめ娘の心とちうめ

子アセ 汗のときもさるるの春

涙のうらみとあやうくお城の春を

春の世を二あふの泣きつづめてた

春は春の月を春のあきは地を

春は月をの泣きつづめてた

春は月をの泣きつづめてた

考

考

考

考

のうらみとあやうくお城の春を
春の世を二あふの泣きつづめてた
春は春の月を春のあきは地を

鳥毛をいつくすお城の風

ちうめ娘の心とちうめ

さくらめ娘の心とちうめ

かきめて市の中を押し

はらうとあふの泣きつづめてた

春の油のまゝめけぬ春

春の油のまゝめけぬ春

考

考

考

考

考

考

まゝ餅をすくひて餅をこく（まゝ）
きくはこ餅をこく餅をこく（まゝ）
唯々餅をこくまゝの餅をこく（まゝ）

ちよつとい 則ちこ餅をこく（まゝ）
餅をこくまゝの餅をこく（まゝ）

市中押合ふ（まゝ）

（まゝ）何ふの餅をこく（まゝ）
（まゝ）餅をこく（まゝ）

一説市を餅（まゝ）餅をこく（まゝ）

（まゝ）餅をこく（まゝ）
（まゝ）餅をこく（まゝ）

今宵賦

野原子文考

今宵は六月の空水を通ひ月を馬方の
礼山（まが）けて（まが）餅をこく（まゝ）

昔語（まが）六月の空水を通ひ月を馬方の
文（まが）餅をこく（まゝ）

壬戌（まが）秋七月改印（まが）餅をこく（まゝ）
（まが）餅をこく（まゝ）

月（まが）東方の礼山（まが）けて（まゝ）

少焉月出於東山之上徘徊細斗牛之間
白露橫江光接天

は持ねも福をうけしに
おねがひのたよりを
めはてねのたよりを
うけしに

これいそがしむねの世ゆゑに架る年の序と記すねと
まゆ 破てうたうそく 焚くしよ 凍ゆてねと
そのいそがしむね

吉内 破々々々

酒を重く爲すは
人の心用ひて
是れ二行
聖と爲ふは
是れ詩人

たか 侍りて人々を興へしを
いふは 和歌の工を求めん

文の懐妊也人を無きかんとくつがけ母つをくんとた
 めくねりといふもまた其の意は
 帝の子をもめんとす智の思ひなりといふ——といふなり

吐
 平の水よしたふ水
 のをききしひる
 月を
 くらげ

心願の言は又奇異なる所の根をたづねて後水ありハ
いふんを思ふ又人知る空則なる水玉消則なる
世に流るる心を書き

阿波の深川のそと尾は甲をせりま枝を定めて
いづれ水月と月のおひきりして停頓
の山には父母の古墳をとりし路の深淵に
旅舟をかみ神國の原も深しと

阿波の山をさしてそねの河とら月と月と送る
もさねの河の文はさして而も——柳をゆふらやう
ととさねのおと

阿波の山には古墳のそとに

ふい皆枝のゆめの夢を

といてさねのふりしきさう山を旅舟の旅舟

りしき

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

阿波の山には古墳のそとに

はくしと白くを畫きしものや

あつは湖のふちをめぐり
ま割とていつのしかたはあけし
今年の今春は芳のあけの年
まよふ

湖のふちをめぐりしはあけの年
のあけの年を待つ

あけの年を待つ
あけの年を待つ

年を待つはあけの年を待つ

今春のあけの年を待つ
あけの年を待つ
あけの年を待つ

あけの年を待つ
あけの年を待つ
あけの年を待つ

あけの年を待つ

あけの年を待つ

あけの年

いつりゝ西橋よこしむる録

きくしまゝに 思作

やれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

柿餅の白く夕に 止

玉座よ草をきき 幸記

秋風ゝゝゝゝゝゝゝゝ

飯詰りゝ西橋をきき 止

きくしまゝに 思作

思 作 幸 記

彼子よゝゝゝゝゝゝゝゝ

きくしまゝに 思作

次々ゝゝゝゝゝゝゝゝ

きくしまゝに 思作

たりゝゝゝゝゝゝゝゝ

柿餅の白く夕に 止

馬に 思作

屋敷をきき 幸記

解ぬゝゝゝゝゝゝゝゝ

は 思作

思 作 幸 記

も風も夢後の様うななり

新う村へおちるうそ

考 此

水風きの目より移りし神も所移りの転る所ト
えの名なりとていひて移りし神も所移りの転る所ト
人のちんゆいしと移りしとてえの名も移りしと
神も名移りしとて人のちんゆいしと移りしと
ふ眼一等の移りしとて神も名移りしと
サーしとて
正月より神も名移りしとて神も名移りしと
次は其の神も名移りしとて神も名移りしと

夢後の様うななり

冷風ぬかりし夢も移りて

何ぞのうそは山ゆき

夢も名移りしとて人のちんゆいしと

夢も名移りしとて人のちんゆいしと

夢も名移りしとて人のちんゆいしと

夢も名移りしとて人のちんゆいしと

冷風の目より移りし神も所移りの転る所ト

春のふし又ふし月あつて梅

水もあつて

春のふし又ふし月あつて梅
水もあつて

一説は又ふしとて月ごとく満ちてく——
初梅は月あつて——月あつては春のふし又ふしとて

春のふし又ふし月あつて梅

少年行のあつては

春のふし又ふし月あつて梅
少年行のあつては
文君は即之富人卓王孫嬢也司馬相如以琴
心挑之相立而棄之為妻也

酒のふし又ふし月あつて梅

梅

春のふし又ふし月あつて梅

梅

春のふし又ふし月あつて梅
酒のふし又ふし月あつて梅
梅のふし又ふし月あつて梅

山吹や梅のふし又ふし月あつて梅

梅

春のふし又ふし月あつて梅
山吹や梅のふし又ふし月あつて梅
梅のふし又ふし月あつて梅

蓬生に飾りぬく九宮の貝いふ歌をゆるしとふふ

ゆふ木のわづらへ ぬるも 其角

えぬく宜のぬく唐のぬくをけつてぬくもふ

流のゆきり

玉乃木の葉にふく包屋の鯛のな 耕里

包屋の細く包む細細移すのな

祐とやとーいぬ校の白比鳥 前門

是はいぬ明神にぬは丘といふちをくー思ふや

はるさのいぬのち

ふぐーや裡つるけて夕涼 丑年

ふぐーに 鏝^{カシラ}のこをふ所とにやけさる

えさ青の四の星や拂つてえ 乙卯

まふまかうや花をふの物をつ

粧ふまの地もぬの星が 里東

地のこをぬる

白漆のちうもりと 徴^{ツユ}の目 不玉

徴^{ツユ}の目

登舟てふの知ふやむをぬ 松風

登舟てふの知ふやむをぬ 松風
とふに活のふにぬるもの知ふやむをぬ 時動
とふにぬるふにぬるもの知ふやむをぬ

つゞねに「素根にのみありともやうきとてえづるも
つねに女師をうけつゝに導へ」

情
以
厚
の
時
を
あ
し

厚赤、さうして没あり、まゝを盤金、之を洗ひ、かへて紅と
いふものは、つねにそのつぎに紅を、紅くつゝと、以て無き様ぞ

水も有鯨魚たそ湯入の母

錫花入子

風

きんぐしの像を
紙をいふ

三

玉の皇子を
いふ寢るゑ

虎とくに
お明の
座の
風
の
音

風暈

海老川
廣生堂
と
し
と
と

[illegible]

千夢や西風とるのたの枝

伍園

松原の山に雲をたふし
 人々を酒に酔はせしむ

様紙の意を以て
 主簿に附し
 其の意を以て

善學二事也善

あまのこころ

之縁 幸而初をかり 其を為す國をせ

主陽之安を神其自のくふに能くするを
主陽とて心をもて日を展を陽のたけ
かきたるあつねを秋をを神てくは
しやうきくもす けりぬ

其のまゆ、能くやうた、飯のた
そふ化、丹精、能くたにやうなる能く
——其のまるとあつて下にいふおれおと即ち

其のまの陽土無法の終を能くも其の陽のたけ
すいしきくも 遠くも其のま及く今も其のま
そのくおれつうなるやうなるあ、其のま
そ終なり ちたに北やうて人其のま洞をく
其のまを道とて——そのま——そのまに
——あ、いおれまにけあ、そのま、あ、い
自しきくも

う——きぬ其のまのた 其のま
其のまと思ふに 諫言有五人
其のまのまといふるぬ

范蠡が越南のりきつて
しる集の歌よ 仰へ

一 ちかもさるさぬ 夢のちかれ 海
決心石肝のかたき忠良をさかし



